

令和6年度 青少年育成運動活性化研究協議会

令和6年11月8日（金） かでる2・7（札幌市）

まずは子どもを幸福にしよう。「教え」から「学び」へ。



道内で青少年育成運動に取り組んでいる皆さんと、活動の現状や課題などについて共通理解を深め、地域活動の活性化を図るため研究協議会を開催しています。

今年は、基調講演と分科会の1つにZoomを使い、地方からも視聴できるハイブリッド方式で実施しました。

基調講演

演題

子ども「やりたい、知りたい」を大切に —地域とともに歩む学校—

学校法人 学びのさと自由が丘学園 理事長 **細田 孝哉 氏**



不登校児童が34万人を超え、さらに急増しています。いろいろ対症療法的な施策が執られています。が、根本の部分での改革がされていないのではと考えています。

「こどもを教え込まなければいけない」という発想から離れられていないからではないでしょうか。競争が求められる中で、こどもは自分の力を発揮できない息苦しさから、学校からこぼれ落ちていっているように感じます。

▼まおい学びのさと小学校の理念

「こどもは放っておけば何もしない、だからテストとかで尻をたたいて強制的に勉強させる。」というのがこれまでの発想だったと思います。

我々は、強制や競争、成績で格付けした管理による「教え」ではなく、こどもの「おもしろい」「知りたい」「やってみよう」そんな人間が元々持っていた思いを大切にしたいと考えています。

こどもがそれぞれ協力し合い、個性を大切に、他人にも寛容でいられること、自分の頭で考え、自由で自立した学びによって成長していく、それが私たちの基本的な考え方です。

「1オンスの経験は、1トンの理論にまさる」は、100年ほど前の教育者デューイの言葉です。教育や知識の系統にこどもたちを合わせて教え込むのではなく、こどもの“おもしろい”“やりたい”といった知的好奇心を信頼して、出会いや経験、自らの気づきを支援する事が大事だと説いたものです。

こうした考えを基に、こどもを中心に、大人がサポートしていく。私たちは、そんな学校教育を展開しています。

▼学校の主人公はこどもたち

学校というコミュニティの中ではこどもも大人も対等です。多数決の全校ミーティングでは、数が多いこどもに押し切られます。大人には「何これ？」という結論になっても、それはそれで良いんです。

やってみて上手いかなければ、変えれば良い。その過程の経験や感動が大事なんです。

でも、体験・感動は数値にはなりません。喜びの表現、「あなたは4、あなたは2」とはなりませんよね。なので、私たちは数値評価をしません。比較をしません。だからテストもありません。

校則もなく、学校での約束事は全校ミーティングで自分達で考え決めていきます。運動会などの行事も自分達でつくります。

こどもは一人ひとりが全く違うので、“けんか”も多いんですが、けんかは“相手とどう折り合っていくか”を学ぶ機会です。自分で考えることで、人間関係を学ぶことで、成長します。

▼こどもたちの居場所・学びの場

私たちの学校は、学習指導要領に沿って運営する私立の認可校ですが、自己決定と体験的な学びを重視しています。そこは、こどもにとって自分自身でいられる安心な居場所であり、「おもしろい」がいっぱいある学びの場、こどもも大人も人として対等な学びの共同体です。

それは、学校でも地域でも、大人から比較・評価されない、という前提があって成り立っていると思います。

私たちの学校がオールマイティーで、現状の解決策だとは考えていませんが、これまでとは異なる教育の考え方をベースとした学校です。「そういう考え方もあるね。」と感じていただいて、日本の学校教育における一つの試金石として、学校が変わるきっかけになればと、考えています。

まおい学びのさと小学校の概要

- ・開校 令和5年4月長沼町の廃校を利用して
- ・児童数 120名（学年定員20名、現75名）
- ・授業料活動施設費 4.2万円/月
- ・令和8年4月には、中学校を開校予定

第1分科会

テーマ「子どもが中心となる地域社会を目指して」
 話題提供「子どもの声をまちづくりに生かす
 —あびら教育プラン—」



笹山氏

発表者 安平町教育委員会学校教育グループ主査 笹山 陽平 氏

コーディネーター 空知教育局社会教育指導班社会教育主事 斉藤 萌 氏

- 安平町では4つの事業を通じて、様々な「学び」から「挑戦」に繋げる独自の教育手法「あびら教育プラン」に取り組んでいる。

- ① 遊 育（遊び）＝「機会・場所・遊びそのもの」を提供し、遊びを通じて育つプログラムを組む
- ② あびらぼ（学び）＝町を舞台に、好奇心に火をつけるようなプログラムを提供
- ③ ワクワク研究所（挑戦）＝自分自身がワクワクするプロジェクトを実践する場を提供
- ④ ABIRA Talks（挑戦）＝「やってみたい」を叶えるオフライン版クラウドファンディングの場を提供

- 子どもの声をまちづくりに生かすため、「子ども意見」が反映された事案

課題 = 子ども園脇の交通量が多く、通園児童・生徒の安全性を確保

対応 = アンケートを通じて、子ども意見を聴取 → 道路じゃなくなればいい！

結果 = 「子ども意見」が町議会で採用され、町道（町の道路）が廃止

- 少子高齢化の時代だが、テクノロジーの進歩と長寿社会に対応するための変革には、子ども・若者の力が絶対に必要。どんどん子どもの声を聞き、まちづくりに生かしたい。

第2分科会

テーマ「困難を有する子ども・若者が求める支援」

話題提供「地域で支えるひきこもり・不登校 —心に留まり、寄り添う—」



田中氏

発表者 NPO法人レター・ポストフレンド相談ネットワーク理事長 田中 敦 氏

コーディネーター 石狩教育局社会教育指導班社会教育主事 只野 浩太 氏

- 多様化するひきこもりは、全国推定146万人（15～64歳→50人に1人がひきこもり）。

ひきこもるきっかけは、退職や人間関係が多く、中高年のひきこもりが多い。

理由としては、世間に知られたくない、助けてと言えない、就労経験（挫折）がハードル。

- 実施している、大きな3つの活動。

●在宅活動（手紙・絵手紙によるピア・アウトリーチ活動）

●居場所活動（当事者会「SANGOの会」や居場所「よりどころ」当事者会・家族会の開催）

●会報「ひきこもり」通信作成（在宅でも無理なく社会参加し地域の理解啓発を図る）

- 地域でひきこもり・不登校、そして家族を支えるために必要なこと。

●本人や家族の自助努力では解決が難しいため、「ひきこもりは誰にでも起こりえるもの」と地域社会に粘り強く啓発していくことが大事。

●家族には、①つながる（信頼できそうな人）、②届ける（有益な情報を得る）、③見直す（関わり方を検討）の段階を経ながら、支援していくことが必要。

第3分科会

テーマ「多様な価値観・考え方を尊重する」

話題提供「多様な在り方を認め合える地域社会 —知る・つながる・広がる—」



柳谷氏

発表者 さっぽろレインボープライド実行委員会実行委員長 柳谷 由美 氏

コーディネーター 北海道教育庁社会教育課社会教育主事 川崎 亜蘭 氏

- 全ての人が、「みえやすい違い」と「みえづらい違い」を持っている。

「みえやすい違い」＝見た目の性別、身体的な障がい、服装、年齢、体格、利き手

「みえづらい違い」＝国籍・出身地、価値観、家族構成、育った環境、性自認、性的指向

- 性のあり方を作っている4つの要素

①身体的性（出生時に与えられた性）

②性自認（心の性）

③性的指向（好きになる性）

④性表現（服装・仕草などの性）

- LGBTQとは、性的少数者（セクシュアル・マイノリティ）の総称の1つ。※多数派（マジョリティ）・少数派（マイノリティ）
 LGBTQの割合は、9.7%（11人に1人）。割合は、AB型、左利き、国内で多い苗字の人と同じような割合。

- 道内の学校でも取組が少しずつ進んでいる。

・ジェンダーレス制服（性差を感じさせないデザイン）の導入

・小・中学校では、「性別」や「人権」を考える授業でLGBTQについて学習

- 全ての人が「みえやすい違い」、「みえづらい違い」を持っている。根拠のない思い込みや偏見が、時に誰かを排除することに繋がる。多様な在り方を認め合える社会制度の構築が必要。